
少年少女

やまだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女

【Nコード】

N1530L

【作者名】

やまだ

【あらすじ】

田中くんは今寂しい。みんなもたぶん寂しい。集団の静かな狂気連絡方法。綺麗なお人形を殺してずたずたにすること。

やっぱりこうなった。

田中雄一くんが学校を休んで今日で10日目だった。

「やばいね田中不登校やん。」小池くんが言った。「誰か田中くん
にプリント持ってきてくれる人。手を上げてください。」サキちゃん
先生がいった。誰も手を上げなかった。「里蔵さん持っていて
くれるかな？」私が選ばれた。「裕子大変やねえ」サキちゃんが同
情した。

今日の。帰りの会の。出来事。

田中くんは良い子供だった。かつこよくて勉強も運動もできて、友
達も多かった。そして誰に対しても優しくかった。だからイジメられ
た。

田中くんがいじめられ、追い詰められていく様子は、大きく開いた
花が、時間をかけてしぼみ枯れていく変化に比喩ができた。みんな
田中くんをいじめることを通して田中くんのエネルギーを吸い取っ
ているみたいだった。掃除時間に田中くんの口の中に雑巾を無理矢
理詰めて「お前きめええ死ね！」と笑いながら罵る高橋くんの顔
はきらきら輝いていた。

なんかこう楽しいよね人を貶めるのって。それってすつごくイケな
いことなんだけど。その罪悪感がかえって人を興奮させるっていう
か。なんか、田中くんが泣いてるの見てたら嬉しくなるの。私の親
友の佳奈ちゃんが交換ノートで書いた文章。

「田中ってホントはいじめられキャラだったんだよ。なのにあいつ無
理してリーダーぶっててさあ」集団下校で高橋くんがそう愚痴った。

猫

さかもとさんはいった「いじめはやっぱりいけないよね。私先生に相談する。」

翌日「やっぱりちよつと怖いしめんどくさいし。」とちくりをやめたことを坂本さんは私に懺悔した。

高橋にばれたら最悪だしね。と付け加える。

日に日に確実に。追い詰められていく彼。確実に性格が変わっている。田中君に話しかける人間はもはやいない。彼は隔離され。バイ菌だらけの病人の目で私たちを見る。

「なんか違う人種みたいだね。あのひととうちら。」佳奈ちゃんそんなことなんてない。一か月前は普通だったよ。同じとか違うとか考えてもいなかったじゃん。

昼休み高橋君とほかの男子が教室で追いかけてっこしている。教室に田中君はいない。「昼休みってあいつダッシュでどっか行くじゃん？あとつけたらさーなんかあいつ裏庭に座って本読んでんだよねー引くわー。」と以前高橋君は言っていた。田中君が、まだ学校へ通っている時。

「おまえマジないし。ちょぶつけんなし。」「あほやないん」「あれ？どこいったでしょう。」

「男子うるさい！」桜ちゃんが媚びた笑顔で男子に向かって言う。

「おまえの声がつつさいんだよーイソノキリコかつつの。」「はー？なによー！」「そつくりだしまじそつくり。」

こうやって巧みに男子と仲良くなる女子を私は素直にすごいと思う。「なんかさ、中田さんたちってそういうやり方、生まれたときから知ってるんじゃない？って時々思う。」佳奈ちゃんの交換日記からそばにデスノートのミサミサが書いてある。手書きの吹き出しには「小悪魔ギャルきもい」。

教室のうるさは私と佳奈ちゃんをすり減らしていくように

思う。私達やそのほかのおとなしい子はそれにじつと耐える。そして弱い仲間同士ですりより、よるべなさを慰めあう。

田中君は仲間がいらないからそこから逃げた。そして、不登校になることよって一日中教室から逃げることができた。私は彼がすこしうらやましかった。

ニートたち

私は時々田中君のことを考える。何をしたいんだろうか？どこにいるんだろうか？。そういうことを考える。

彼は自宅でじっと息をひそめて学校という重たい枷から逃れられたことに安心しているのだろうか。

それともお母さんかお父さんに毎日のように叱られて、もしかしたら精神病院か、フリースクールみたいなところに連行されているのだろうか？

私は学校の授業の時間にそんなことを考えている。彼が喜んでいても苦しんでいても私はそれを羨ましく感じる。なにせここは息苦しい。呼吸がまともにできない、吐き気成分がたつぷりと含まれている空間なのだ、学校というものは。

田中君みたく私も不登校になりたい。おひるごはんが終わって、私は教室で佳奈ちゃんと明日の体育について話してた。マラソンめんどくさーと佳奈ちゃんが言ったのでぼつりその一言が出てきた。

だめだよーニノマイふんじゃーと佳奈ちゃん言う。

「ニノマイってなに？」「人と同じことを繰り返して失敗しちゃうこと。」「佳奈ちゃん物知りー佳奈様ーすごー。」「殴るぞ。」

不登校になったら休み癖がついちゃってまともな社会人になれないんだと佳奈ちゃんは言っていた。でもふとーこのコドモっていま何万人もいるんでしょう？で、むかしはもつとその数が多かったんでしょう？今その子たちってどうなってるの？私がそう尋ねたら、ニートだよ！と佳奈ちゃんは叫んだ。隣の席にで寝てた棚橋くんが起き上った。

ノノノ

私たちは似たもの同士で集まっている。暗いものは暗いもの、明るいものは明るいもの。

それは、クラス替えをした時点では曖昧な状態だが、生ぬるい陽水のような温度の学校の空気の中で、時間が経つに連れ徐々にそれははっきりとしていく。

幼稚園の時仲が良かったサエちゃんも、別のグループに入ってから殆ど交流がなくなった。いまじゃあ大学生の彼氏と付き合っているらしい。

ちつとも羨ましくもないし犯罪の匂いもするけれど、サエちゃんはそのことをすつごく誇らしげに話した。

「あんたも彼氏早くつくりなよーメツチャ楽しいから。」

サエちゃんは一足はやく人生経験をしたお姉さんの顔をしている。そして優越感を味わっている。

彼氏ならいるよとは言えなくて、謙遜の言葉を一応いいながらえへえへ笑った。

そういえば、彼氏彼女がいるなんて、私たちの年齢からいうと、相当ませたことだ。多分、サエちゃんの

優越感もそこから来るのだろう。多分クラス内のランクは相当高い。私もいるっちゃいるが、そもそもあれは彼氏と言えるのだろうか。

あの気弱で根暗になってしまった田中くんは。

ストーリー

なにか、なんだろうか、何かの行事の準備だ。文化祭だろうか運動会だろうか。

なにかの集まり。そのための時間の打ち合わせのため、私は田中くんと、何人かの男子かと

連絡先を教えあった。

でも、それがきっかけで、田中くんと仲良くなった。ということは決してない。

田中くんは当時、モテモテでクラスの中では上位レベルのサエちゃんに告白されたくらいだった。

田中くんはサエちゃんをふったけど、それが原因で女子のみんなから恨まれることはなく、むしろ男子からおいタナカーどんだけ女泣かすんだヨーと羨ましい目で見られ、女子からはヤッパ自分から好きって思う相手じゃないトネーと納得され、ますますモテていた。その行事が終わった後も、田中君からは業務用の連絡（お別れ会の出し物、などのメール。田中くんはそういう事のリーダーをよくやっていたのだった。）以外、全くメールは来なかった。

ちなみにわたしはその時田中くんのことをなんとも思っていない。なのにある日突然、好きですメールが田中くんから届いたのだ。ああ罰ゲームかと思った私はそのメールを削除した。

翌日、里蔵さんちよつと委員会のことで話があるみたいなんで来て下さいと呼び出された私

（私と田中くんは同じ委員会に所属していた。）

は田中くんによって人気のない裏庭に連れていかれ、どおして昨日のメール無視したんですかああああと泣かれた。

「ちよつと待つてよ、いみわからない。なにかしたの？ごめん。だってあれいたずらじゃん。」

「違っんですごめんなさい牧の日本語がおかしかったんだ。里蔵さん僕は君のことが好きでした、」

僕の学校生活の支えになってたんです。好きなんです。」

田中君。気持ち悪。なんでいきなり敬語キャラ？

「え？意味分かんない？なんで私なの？」

「僕の好みにすべてがマツチしたんです。理科好きなこととか少しむっちりしてるところとかメガネかけてるとかツインテールとか」

優等生ってこんななのか、ただの人間なのか。いやでも。

「ごめんちよつと気分が悪いから考えさせて。」

「里蔵さん僕の返事にハイと言ってくれるだけでいいんです。そう言って頂けたら、僕の気も済むんです。」

里蔵さんの生活は、表面上全く変わることはありません。里蔵さんが僕に何か働きかけることがある時以外は！

ばくだって僕が気持ち悪いことくらい分かるんです。でも好きな人の前では裸の自分をさらけ出したいんです。」

じっと私の目を見る田中君は、私がいままで思っていたしつかりものでリーダーシップのある真面目なやつじゃなくて

ただの変態さんだった。でも

「ハイ。っていつてくください。」という田中くんの顔はすごく真剣だった。

恋する乙女とストーカーは紙一重。純情な恋は中高生の女の子しかやっちゃいけないだとヒシヒシ感じた。

こうして私と田中くんは付き合うことにした。

ストーカー（後書き）

田中くんがめっちゃ気持ち悪い。

ぐるぐるぐる

田中くんと付き合いました。と言っても私と田中くんの関係は今までと何ら変わることはない。

私が田中くんに付き合うための条件を突きつけたからだ。

みない触らないしゃべらない。まったくのこと今までどおりでいること。

ただし、電話やメールは大丈夫。

それじゃあそういう感じでお願ひしますと田中くんにおじぎしたあと、私は振り向かず家に帰った。

なんで田中くんは自分のことを好きなのだろうか？と悶々としながら私は田中くんとメールのやりとりをしていた。

「里蔵さんこんにちは。」

「今日も委員会めんどくさいです」

「やめちゃいたいなあ」

「田中君、がんばって」

「ありがとう」

「里蔵さんにそう言われると」

「やる気も出てきます」

「頑張ります！」

「そう」

時々電話もした。よくわからない釣りの話やゲームの話をされて私は困った。

いじめがはじまると、メールも電話も一切途絶えた。

。。

田中くんの不登校が始まって一週間。

私は自主的に花を持って田中くんのうちに行った。

もちろん一人で。

灰色や黄土色のおもちゃみたいな角張った家がおんなじように並んでいる

そんな集合住宅街を十分くらい歩いたら田中と表札に書かれた積み木みたいな家があった。

事前に電話をかけたなら、全くもって田中くんのケータイにつながらなかった。

アポなし訪問だ。

チャイムを押したら、田中くんのお母さんが玄関から迎え入れてくれた。

私は泣きそうになりながら、お母さんの案内で田中くんの部屋を指す。

田中君の部屋はむっとした匂いがした。平均的な小学生の勉強部屋なのに、

汗と皮脂と生臭い匂いが混じって目眩がする。ベッドに膨らみが見える。

田中くんだなあと思う。

お母さんがもうあんだ！と剥がす。ほんとにこめんねえと私に謝った。

田中くんは青のストライプのパジャマをきて亀のようにうずくまっている。

ちよっとお茶持ってくるねえ本当にこめんねえとお母さんは台所に行った。

パタパタとスリッパの音が遠くなる。田中くんの姿勢は変わらない。「私とあんだのおかあさんそっくりだね。気持ち悪いくらい。」

「あんだ、母親を私に投影してたんだ。」

田中くんがもそもそと起き上がる。

「あんだ最低だ。」

振り返った。少しむくんだ、白い顔。

ちよつとこつちすわつてと言われた。ベットから離れた畳に座る。

ごめん、でもでもきみがすきなのは本当なんだよ。

結婚したいくらいに

「セックスすんなら母親とやればいいじゃん。」

ばいばい。花をおいて帰った。ブーゲンビリア。

帰り道、佳奈ちゃんからメール来てた。

「いまなにしてる？v」

佳奈ちゃんに歩きながら電話をかけた。全部しゃべった。田中君とつきあったこと

いじめのこと、悲しかったこと、気持ち悪かったこと。

電話を切った。歩いてるうちに見つけたコンビニのトイレで30分泣いた。

ぐへえ

山下んとこのお母さん、めっちゃ童顔。ろりばあ？いやほんとだつて。父親はロリコンなのかねえ。

でも普通にかわいいんだよおかあさん。誰につて？芸能人？えーでも最初に思いつくのはあいつー。里蔵里蔵。

知らない？顔ちよつとかわいいけど電波っぽいの。

山下君は学校に来た。みんなそれを無視していた。けれど悪意のあるものではなく

山下君がクラスに戻ってきたのを自然に受け入れていたのだ。すっかり山下君への興味を失って

別のターゲット（耳が大きい下級生）をカツアゲしたりしていた。

山下君は空気のように自分の席へ座っていた。

それをじっとみていたわたしに、山下君はなんにもない目で笑いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1530/>

少年少女

2010年11月15日10時14分発行